

1 この泥岩はもと粘土だった

この泥岩は雨と太陽が繰り返されると粘土化する。普段この地層は河原小石が覆られて見えない。2019年の秋台風で土手が壊れ氾濫し、流路を変える工事で河床を掘り下げたため露頭が見えることになった。一般的に泥岩は泥が海中に堆積し長い年月と押圧により固まってできる。今回砂防工事で長い間地中にあった泥岩が掘り起こされ、川原に仮置され小山となった。

3か月ほど見ていたら、泥岩の山は太陽と雨水にさらされ乾湿繰り返しが起こり、表層の泥岩は、次々に細かく割れ、ついには泥状になった。その結果、泥岩はどんどん粘土化して溶けていった。岩石も生き物なのだ。そこで初めて崩れて変化する表情が美しいことに気づいた。

しかし形は日々変化するのでいいなと思っても、雨の降った2日後には形が見えなくなってしまうことも多い。自然な表情をそのまま写し取ることができたらと思った。焼成すれば、硬くなり耐久性を確保できるかもと思っている。

地層の表情を残すという意味では土壌学のモノリスと同じである。しかしまだ焼成前でしかも陶芸以前の話かも。

粒子径による泥、砂、礫の分類

泥	粘土 シルト	粒径 0.005mm以下 粒径 0.074~0.005mm
砂		粒径 2mm~0.074mm
レキ(礫)		粒径 2mm以上



泥岩河床の景色 あきる野市五日市

日本列島誕生の1500万年ほど前、五日市町層群は秩父帯（1億5千万年前）の石灰岩層に囲まれた内海に堆積した。地層は5層ほどに区分されるが、そのうちの2, 3層目にある小庄層、館谷層は泥岩層が主体。貝化石、タカアシカニ、珍獣パレオパラドキシアなどが出ることで知られている。その頃の水深は小庄層で200m、館谷層で600mの深海と言われる。そのほか亜炭や炭酸塩コンクリーションが見られる。



2 泥岩の表情いろいろ

写真の説明

- 1 河床の泥岩
- 2 河床から掘りだされた泥岩
- 3 泥岩層河床の風景
- 4 断層崖の玉ねぎ状泥砂岩
- 5 河床の泥岩層
- 6 炭酸塩コンクリーション
- 7 ストロマトライト風泥岩
- 8 河床の泥岩の山



耐え難きに耐え忍び難きを忍び・・・コロナ退散念じつつ

だんだん神がかりにならざるを得ない状況。そこで陶研究会の神様を考えた。コロナが世界的なので、この際陶研究会も世界的を目指そう。そこで妖精ノームが陶研究会にいい神様かも。この際陶研究会の名前も「ジオノーム・アート&クラフト」とかに改名して、世界に向けて GOTO 発信。土俵の砂から鞍替えのようですが、まあ八百万の神の日本。出直しというのはいかがか！！

と思ったが、結局陶研究会の神様は芳村先生か！！そういえば最後はマスクされて・・・

ヨーロッパ 伝説の妖精【ノーム】は幸運を呼ぶ縁起物♪



ノーム（妖精）

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

ノーム(英: Gnome)は、スイスの錬金術師パラケルススが提唱した四大精霊のうち、大地を司る精霊・妖精 (elementals)である(右図参照)。主に地中で生活しており、鉱脈の場所などにも詳しいとされる^[1]。

身長 12cm ほどの小人で長いひげを生やした老人のような風貌をしており、派手な色の服と三角帽子を身につけている^[1]。手先が器用で知性も高く、優れた細工品を作る^[2]。ゴブリンやドワーフ(ドヴェルグ)、ノッカーと近い関係にあるともいわれ、近年では多数存在する地中で暮らす精霊の一種族として扱われることも多い^{[3][1]}。

「ノーム」は英語読み。語源はギリシア語の「ゲノーモス(Genômos, 地中に住むもの)」で、「グノーム(Gnom)」の女性形「グノメ(Gnome)」が本来の読み。土鬼とも和訳される